

学 位 論 文 要 旨

氏 名 高橋 純一

題 目 社会科授業力向上に寄与する教師集団の働きと影響に関する研究—富山市立堀川小学校における問題解決学習を実践する教師の成長を手がかりとして—

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本研究は、社会科の授業力向上に寄与する教師集団の働きやそれが及ぼす影響について、問題解決学習の伝統的な実践校である富山市立堀川小学校の教師の成長を手がかりにして、明らかにすることを目的とする。本研究の章構成及び内容は、以下のとおりである。

第1章では、社会科における教員研修研究の動向について把握し、社会科授業力とは何かを明らかにした。また、社会科授業力の育成を図る教員研修に関する先行研究を整理し、検討した。これまでの先行研究において、社会科授業力向上は、教師集団の取り組みの一側面である教員研修や校内研修に焦点を当てて論じられていた。それに対して、教員研修や校内研修という限定された枠組みからではなく、教師集団の総合的な取り組みに着目して、社会科授業力向上の全体像に迫る研究に着手した。

第2章では、社会科授業力向上と教師集団の働きとの相互関連を分析する枠組みを設定した。主に、筆者らが実施した社会科教員研修による教師相互の学びに着目し、「子ども理解を深めていった場面」と「子どもを見取るための教師の力量形成に関わる場面」の双方に関する協議内容を分析した。双方に関する分析をもとに、「①教師が所属する教師集団によるどのような働きかけによって、子どもの学びの良さやその新たな価値に気付けるようになるのか」と、「②教師が所属する教師集団によるどのような働きかけによって、子どもを多様な視点で見取ることが可能になるのか」という分析枠組みを提示した。

第3章では、問題解決学習の原理に着目して、堀川小学校における教師の社会科授業力と教師集団との相互関連について明らかにした。まず初めに、戦後の初期社会科における問題解決学習の方法原理を明らかにし、その典型的なモデルとなった谷川瑞子教諭による『福岡駅』の授業実践を検討した。その上で、当時の堀川小学校における教師の社会科授業力について論じた。次に、社会科授業力形成に向けて堀川小学校の教師集団の及ぼした影響を解明した。その結果、問題解決学習の原型が創造されていく1950年代から1960年代前半に、教師が授業研究を中心とする教員研修において、子どもの思考変容を捉える研究内容を深めたこ

とを明らかにした。

第4章では、問題解決学習の実践に着目して、堀川小学校の社会科授業力と教師集団の働きを明らかにした。ここでは特に、問題解決学習の中でも、問題発見場面に関するX教諭と、問題解決場面に関するY教諭の社会科授業実践をそれぞれ検討した。X教諭の社会科授業実践は、主に授業記録や授業資料をもとに分析した。他方、Y教諭の社会科授業実践は、授業記録にある教師の働きかけやインタビューをもとに分析した。その上で、両者による社会科授業実践を統合し、そこから単元構想段階の授業力を抽出して、「子どもの育ちなど、生き方の側面を位置付けて単元を構想する力」と整理した。また、問題発見の授業場面では、「子どもの思考を広げて思いや願いを表出する力」と「学習の期待感を引き出すなど個性的な追究への意欲を喚起する力」に整理した。さらに、問題解決の授業場面では、「子どもが着眼した背景を探り明確化する力」と「対話を促進するなど個性的な追究を形成・深化・発展させる力」に整理した。そして、堀川小学校における問題解決学習を実践する教師の社会科授業力を、「子どもの解釈を基盤とした社会科授業力」と捉え直した。

次に、上記の社会科授業力に影響を及ぼす教師集団の働きについて、「同僚教師からの解釈に対する問いかけ」と「解釈力を高める自由闊達な対話」の2点を見いだした。同僚教師の問いかけや対話が活性化している背景には、「子どもを理解する高い力量（鑑識眼）を備えた研究主任の存在」がある。上記3点の教師集団の働きの根底には、「きびしい仲良し（同僚性）を基盤とした組織風土」がある。真に子どもを理解するために、教師同士で妥協しない「きびしさ」が組織風土として根付いている。そのことが、堀川小学校の教師に子どもの学びの良さやその新たな価値への気付きをもたらしていることを明らかにした。そして、現在でもなお、子ども理解を中心に据えた授業研究の伝統が継承されている。

第5章は、社会科授業力向上に寄与する教師集団の働きに焦点を当てて、学校現場に示唆されることを述べた。第1は、子どもの内面世界に迫る教師の姿から、示唆されることを述べた。特に、子どもの深い学びを見取る観点から、示唆的であることを論じた。第2は、子どもの解釈を中核に据えた校内研修の実態から、示唆されることを述べた。特に、校内研修における同僚教師の働きかけと子どもの解釈力の高まりとの関連から、示唆的であることを論じた。第3は、教師集団の構成員である研究主任の役割から示唆されることを述べた。特に、校内研究組織の創出や後進の育成の観点から、示唆的であることを論じた。

終章では、研究の成果と課題を整理して、本研究のまとめとした。